



こーひーぶれいく

コロナ禍でも前進する剣道

松村 宏

Matsumura Hiroshi

私は趣味で剣道をしている。そして、2人の息子たちも大学と高校で剣道をしている。剣道は夏は暑く冬は寒い。また、稽古は単調できついものが多く、過酷な競技だ。決して日々の稽古は楽しくはない。息子たちに、そのような剣道を続けられている要因は何かをたずねると、2人そろって同じ答えが返ってきた。「同じくらいの実力の切磋琢磨できる仲間がいること。」つまり、苦楽を共にする仲間の存在と試合で競い合うことであると言える。そして、それはコロナ禍で厳しい形で露見している。

この原稿を書いている現在(2021年8月末)は、新型コロナウイルスの第5波が来ている。私の指導する小学生の剣道教室は、コロナ禍前は近隣では比較的団員数が多い方であった。昨年からの新型コロナウイルスによる相次ぐ稽古自粛の繰り返しの中、団員数が激減しており、まさに風前の灯となってしまっている。まさに仲間を失ったことで続けられなくなる負のスパイラルに入っていると言える。試合もここ1年半は全くなくなってしまい、残っている子供たちも目の輝きが失われているように感じる。つまり、剣道を続けるための大事な要素である仲間と試合が失われているのが現状だ。

第5波が来る前は、比較的コロナ禍が和らいだ時期があり、コロナ禍前以来久しぶりに試合が企画されていた。小学生から大人までの5人の混成チームで戦うユニークな団体戦で、私は大将で、大学生の長男は中堅でエントリーさせていただいた。私は長男と同じチームで試合に出るのは初めてのことで、貴重な機会をいただいたと思った。コロナ禍による稽古自粛が長く続いていたことで体が思うように動かなくなっていたが、毎日トレーニングし、稽古もして、かなり状態が良くなっていた。準備は万端であったが…。新型コロナウイルスの第5波が到来し、試合には出られなかった。落胆した。試合



があるから頑張れるとは、本来は頑張る動機としてふさわしくないかもしれない。しかし、やはり、目標があるから頑張れるのだと、大人の私でも感じた。

次男はインターハイが狙える強豪高校で剣道をしているが、高校剣道界も例外ではなく、ことごとく試合が中止になっている。昨年度の入学早々から全国一斉休校だった世代で、部活の最上級生になった現在もまともに稽古ができていないが、自宅でオンライン部活を続けている。仲間がいてこそできることかと思う。高校生活がわずかになってきているが、何とか早く元通りの世界になって欲しい。

このようにコロナ禍でのマイナスが大きいのは確かであるが、剣道界は大胆に変革をして前進しようとしている。1つ目は、マスクの着用と面にプラスチックガードを装着することが決められた。2つ目は、試合のルールを変更し、接近戦である鍔ぜり合いが禁止になった。マスクの着用や道具の変更、ルールの変更までもがあった競技は他にあるだろうか。マスクをつけての最初の稽古は非常に辛いものであった。息が思うようにできず、水中でおぼれているような感覚に陥った。しかし、何度もやっているうちに慣れてきて、今では当たり前になっている。ルールの変更は、競技自体が大きく変わることになった。変化と変化による反発を恐れずに改革し、まさに今、剣道界はこの困難を乗り越えようとしている。

研究はどうであろうか。私の加速器の分野はチームで研究することが多い。研究仲間がいて、学会で議論することが大事と言うのは剣道と共通しているように思う。コロナ禍で実験や学会の中止が続いているが、剣道界と同じように変化して前進しなければならぬと感じる。

(高エネルギー加速器研究機構)